フジ・リバー賞
『パパの「男のこだわり」』

こむぎ

「だから壁は絶対これがいいんだよ」

パパはこれだけは譲らなかった。

夢のマイホーム。
生まれた時から見慣れたアパートの色あせた天井とも、これでおさらばだ！
舞い上がるパパとママにつられて私も最初は楽しみだったけど、何度も住宅展示場を巡るうちにすっかり飽きてしまった。
今日だってもう何時間も色々な家を見に行った。
私にはどれも同じに見えるのに。

その日何度目かのキャンディーを口の中で遊ばせ退屈を凌いでいたとき、対照的にパパは一人燃えていたのだ。

「別にモデルハウスと同じでいいじゃないの。こっちの方が安く済むし。イマドキのおうちって感じでしょう。ね、麦ちゃん」

こっちの壁でいいわよねー、なんてママに同意を求められても、正直ピンとこない。
壁なんてどれでもいいんじゃないの？
それより私、早く帰りたいし。
6 時からのアニメ、始まっちゃうし。

「麦の同級生の笹原さんのお宅の壁もモルタル外壁だろ。麦もお邪魔したことあるよな、素敵なお家だったよなあ。」

私は曖昧に頷く。
同級生の恵ちゃんの家は確かに素敵だった。

すごく綺麗なお家で、恵ちゃんのママなんてピアノまで弾いてくれたのだ。
私もピアノを弾けるママが良かったなあ。
そうボヤいたら、
「お母さんだってやろうと思えば毎日ショパンだって何だって弾いてあげられるわよ、
うちのアパートの壁がこんなに薄くなかったらね」
って返されたっけ。
確かにその時も隣の部屋から下手くそなギターが聞こえてきたから、納得せざるを得なかった。
お母さんがピアノをやってたなんて話、1回も聞いたことないけどね。

「僕だって正直ローンは痛いよ。だけどさ、長い目で考えてみてくれよ。地震とか火事とか何があるか分からないだろ」
「火の元はあなたのタバコってわけ？」
「麦が生まれてからもう吸ってないだろ。ママの料理だって怪しいよな、麦？」
「まあひどい！」

展示場の職員さんもタジタジだ。
さっきから何度も同じようなやり取りを繰り返してるんだから、いい加減呆れてきちゃうよね。
うちの親がすみません。心の中で謝っておいた。

「見る人が見れば分かるんだって。暖かい表情ってやつ」
「パンフレットの言葉そのままじゃない」

一進一退の攻防はなかなか終わりそうにない。
口の中のオレンジの風味ももう無くなりそうだ。

私は不思議だった。

今までパパがこんなに何かに固執したことはあっただろうか。

亭主関白なんて程遠い、我が家はもっぱらかかあ天下ってやつだ。
いつもは尻に敷かれてばかりのパパが、今日はなかなか首を縦に振らない。
なるほどこれが「男のこだわり」ってやつか。

「ママも麦も、守ってくれるんだよ。この厚い壁が」

あついと言えば、パパの熱さも今日一番のピークを迎えていた。
メラメラって体の周りに火が見えるみたい。
ママもその熱量に心を動かされているみたいだ。

ん、厚い……？

「ねえパパ」

突然の声に二人は大げさに驚いた。
ひどいなあ、まるで私のことなんてすっかり忘れてたみたい。
パパとママの視線が私に注がれる。

「壁が厚いってさ……ピアノも弾ける？」

私の言葉を聞くと拍子抜けしたような顔でパパは笑った。

「ああ……もちろん弾けるよ。音漏れもしにくいからな。麦はピアノを習いたいのか？」

「うーん、私は別にいいんだけど……」

ちらっとママの顔を見る。まだ不思議そうな顔をしている。

「ママがね、壁が薄くなかったら毎日ショパン弾いてくれるって」

そこでママはやっと思い出したらしい。

その笑顔が引きつっていくのが面白かった。

パパは勝ちを確信したのだろう。

笑いながら私の頭を撫でた。

「ママがショパンか。これはマイホームの楽しみが一つ増えたな」

「全くもう、やんなっちゃう」

そう言いながらママも笑っている。

つられて私も笑顔になった。

壁のことなんて私にはよく分からないけど、みんなが笑顔になれるんだからきっとこれが一番だよね。

パパの「男のこだわり」もたまにはいいかも。

展示場を出て、家族３人で手を繋いで歩く。

帰り道は楽器屋に寄ろうか、とパパが言った。

ピアノの楽譜を買いに行くんだ。

ママも何だかんだ乗り気なのが可笑しい。

私のも買ってくれるって言うから、わくわくしてきちゃった。

私もショパン弾けるようになるかなあ。

パパのこだわりの壁の、新しい家。

もうすっかり寒くなっていたけど、家に響くママと私のピアノの音色を想像すれば、そんなのへっちゃらだ。